



千葉大学医学部同窓会報 第114号

題字 故 鈴木五郎 (大11卒 元るのほな同窓会長)

編集発行者
千葉大学医学部
るのほな同窓会報編集部
〒260 千葉市中央区亥鼻1-8-1
千葉大学医学部内
るのほな同窓会
電話 (043) 222-7171 内線5026

附属病院 就任の挨拶

脳神経外科科学講座

山浦 晶(昭40卒)



平成9年4月1日より、新美仁男病院長の後任を拝命することになりました。附属病院は多くの問題を抱えており、責任の重大さを感じないわけに行きません。日本の社会はあらゆる分野

で行きづまり、自らの改革が問われています。附属病院も例外ではなく、現在と将来のニーズに合った方針を打出すことが求められています。附属病院の役割は教育、研究、診療とひとくちでいわれますが、学生の早期臨床実習、卒後の初期研修、大学院制度(特に臨床系大学院)、医療費抑制、人員削減、医療分野再編成などの問題があげられます。国立大学の附属病院が今何

をすべきか考えながら、とり組んで行くつもりです。かつてウィリアム・オスラーは「サイエンス・アート・ヒューマニティ」と強調しました。我々はサイエンスの歩みにヒューマニティまたはエシックスが追いついて行けない危惧をもっています。ヒューマニティやエシックスに裏付けされないサイエンスやアートは歓迎しません。最高のサイエンスとアートが、最高のヒューマニティにささえられることを理想として行きたいと考えます。諸先輩と皆様の御支援をお願い申し上げます。

退官記念式典 開かれる

平成9年3月で定年により千葉大学医学部の教壇を去られた清水文七教授(微生物学第一)、佐藤研一教授(歯科口腔外科学)、高橋英世教授(小児外科学)および山口豊教授(附属肺がん研究施設第一臨床研究部門)に対する記念式典、記念講演会および記念祝賀会



清水文七教授



佐藤研一教授



高橋英世教授



山口 豊教授

が、3月15日午後2時より、千葉大学医学部附属病院第一講堂において行われた。記念式典では、谷口克医学部長のご挨拶のあと、井出源四郎同窓会長、桑田次男名誉教授代表、寺島東洋三微生物学第一同門代表、内山清春歯科口腔外科学同門代表、横山宏小兒外科学同門

生がご挨拶された。退官される4名の先生がご挨拶された。

るのほな同窓会総会のお知らせ

今年度のるのほな同窓会総会

を左記により開催致します。同封の葉書にて出欠の返事をお送り下さい(6月20日必着)。

一、日時

平成9年6月28日(土)午後2時より

一、場所

椿山荘(東京都文京区関口2-10-8)

☎03-943-1111

一、総会次第

(1)会務報告

(2)議事

①平成8年度決算承認の件
②平成9年度予算(案)につ

づいて、記念講演が藤田真一先生(医療ジャーナリスト)により、「さらに「患者本位」の医療改革を」

ひとりの受益者として思うこと」と題し、行われた。記念講演につづき、祝賀会が附属病院第三講堂で行われ、当日の記念事業は滞りなく終了した。

なお、退官記念式典に先立ち、各先生による最終講義が、学生ほか学内外多数の方々の出席の下、左記の日程で行われた。

2月4日、清水文七教授

ついて

③役員改選の件

④るのほな同窓会賞候補者選考について

⑤その他

(3)報告事項

①会費自動振替の件

②るのほな同窓会顕彰規定の件

③その他

一、るのほな同窓会賞表彰および受賞者挨拶

一、懇親会

午後3時より5時30分まで
会費一万五千円(当日受付にて申し受けます)

「ウィルスとの出会い」

2月6日、佐藤研一教授

「歯科口腔外科教室のあゆみ」

2月7日、高橋英世教授

「私の歩んだ小兒外科医の道」

2月14日、山口 豊教授

「求めて歩き道一肺病外科学の進歩」

教授就任の挨拶

金沢大学医学部保健学科 城戸 照彦 (金沢大昭54卒)



平成9年4月1日をもって、金沢大学医学部保

健学科教授として転出いたしました。

千葉大学には平成3年2月より6年間余、衛生学助教授として在籍させていただきました。その間、千葉大学るのほな同窓会の皆様には、学内はもとより、各医師会等学外の諸先生方からも、暖かい御支援と御厚情を賜りましたことをこの場をおかりして、心より御礼申し上げます。千葉市は京葉工業地帯の中核に位置し、ここで産業衛生の研究、実践活動を中広く学ばせていただけたことは、今後の研究活動に大きな財産になるものと確信しております。また、従来からの研究テーマである、「重金属の生体影響」に関しても可能な限り、継続したいと考えております。まだ、新しい環境に戸惑う点も少なからずありますが、北陸の地におこしの際にはお気軽にお立ち寄りください。今後とも会員の先生方の御指導・御鞭撻をお願い申し上げます。最後になりましたが、皆様の益々の御健勝を祈念しております。



るの は な 随 想 (八)

ゲッティンゲンから

高野光司(昭33卒)

一九八三年春、桑田次男先生が二つの国際会議の合間に、一週間程ゲッティンゲンに滞在された折、プラント街のパンジオンをお世話した。

明治43年10月、寺田寅彦は漱石にプラント街十八番地の「パンジオンに仮寓致し居り候」と書いている、そのすぐ近くである。この頃の東大物理学の教授一講師達の七人全員がドイツに、その内五人がゲッティンゲン大学に留学した。

桑田先生と親しくお話しして、先生のドイツ文学の造詣の深さに感嘆した。だから、コッホ、ヘンレ、ピルロートなどの科学者の他、リルケの恋人アンドレアス・サロメの住居跡などにもご案内した。

ウィルヘルム・ウェバー街に住む微生物学教室のトムセン教授から、桑田先生と私夫妻が、夕飯に招待されて驚いた。そこは私がかつて、買って住めたら、と思っていた大数学者D・ヒルベルトの家だったからである。ヒルベルトのもとに

は、高木貞治、正田健次郎など、日本の数学を打ち建てた人々が留学した。

私は敗戦の年まで、山紫水明の彦根で、いたずら盛りをのびのび育った。この頃、模型飛行機作りに熱中して、ゲッティンゲンには、世界一の風洞があることを知ったのだった。

旧制最後の学習院高等科の一年は「特別の一年だった」と級友たちは言う。このクラスには、多くの秀才がいる。その一人が、三浦謹之助の孫というより、三浦義彰先生の甥の謹一郎である。彼はゲッティンゲンが好きで、悲しいとき、嬉しいときに訪ねてくれて、私を「理一甲」につなぎとめてくれた。この組には、31年卒の山口がいる。

昭和26年、文理学部に入學した。当時ゲッティンゲンにはプラントはすでに亡かったが、ボルン、ハーン、ハイゼンベルク、ワイツェッカーなどがいて、ドイツ原子物理学のメッカになっていた。後に、彼らの「ゲッティンゲン宣言」によって、

ドイツの核武装は阻止された。私は原子物理学を志していたのに、まわりの友人は皆、医学部を目指していたので、三ヶ月で退学した。だから32年卒の仙波、谷川、戸川なども友達なのである。27年、また千葉大学に入學した。今度は、医学進歩組ではなく理科組物理専攻だった。わずか二十数人のこの「B組」から花岡など四人の医学部教授、歴史民俗博物館の岡田など計八人の教授が出た(教授が偉いとは言わない。念の為)。

稲毛の物理学実験室がお粗末だったこと、高木貞治著「解析概論」に歯が立たなかったこともあって、物理専攻をあきらめて医学部に入学した。

一年生(今の三年)のころ、黒砂は国道上の崖から三軒目の家に下宿した。その夏休みは家に帰らず、米と野菜と、海岸で採った貝だけで生活した。沖の蟹を漁る帆掛け船の大きさを過小評価して、一人泳ぎ出ると往復に八時間かかってしまったのは、その前の夏だったか。この下宿には、熊本大耳鼻科の石川、千葉大精神科の佐藤、フムボルト財団研究生にもなった小山などがいた。一年の頃から生理学教室

に出入りはしてはいたが、これといった勉強をしたわけではない。戦後まだ大学では誰もやっていない剣道を警察の道場へ行ってしごかれた。亡き岩崎(35年卒)などがサッカー部をつくる前に球を蹴ったりもした。ある晩秋の午後、グラウンドでヘモが出てしまった。帰って暖かくしていれば良かったろうに、冷たい土の上で観戦していて、歩けない程ひどくなった。結局、綿貫先生にホワイトヘッド法で手術していただいた。

東洋医学研究会、ドイツ文化研究会、樹徳会、山岳部、テニス部と忙しく、あまり勉強はしなかったが、良い先輩、同輩、後輩に恵まれた。鈴木次郎先生には「上(の学年)」を見る、下を見る。君たちは!と嘆かれたものだ。私の類が多かったのだらう。でも今、33年卒は学内外で随分活躍している。

三年間、鈴木正夫先生宅に寄寓した。先生は万葉調の歌を詠まれ、言葉を大切にされる方で、日本語の乱れを嘆かれていた。私が日本語を大切に思うのは先生のおかげでもあろう。生理学者永井潜先生は、私たちに西洋医学を講じられた。鈴木先生のご親戚であった

ので、講義の後で、鈴木先生宅にお泊りになって、御酒を召されるのが常であった。そんなわけで、ゲッティンゲンに一九〇三年、五年におられた永井先生が「ゲッティンゲン」は森を背にして

いる。千葉には矢作の森がある。千葉は日本のゲッティンゲンだ。」と仰ったり、ゲッティンゲンを「月沈原」とお書きになったなど、直接間接にお聞きすることができた。

永井先生がお住みになったフリードレンダーヴェーク五十一番地の壁には先生の記念板が掲げられている。日本人二枚目の記念板は高木先生のもの。これは「解析概論落第生」の私が市長に申請して掲げてもらった。三枚目は、本多光太郎。「光太郎」は私が長男にいただこうと思っていた名前だ。

台湾大学の季沈源教授はアルファープンガロトキシンの発見者であり、八十をすぎた今でも現役の研究者として活躍されている。先生には毎年のように国際会議でお目にかかった。薬理学の小林、萩原先生をご存知だった。季先生ご夫妻を家にお招きした時、「永井先生には一年違いで教われませんでした。私たちは、先生が台北帝大に長くいな

いで、京城帝大(後に東大)へ行ってしまったので、「長居せん」などといったものです」とお聞きした。

鈴木正夫先生の家の私の部屋で、講義を怠けて外を見てみると、加賀谷先生がチョコチョコと歩いていかれる。時々立ち止まられながら。この道の延長が凡秋道である。十一時半頃、今度は法医学の小使いさんが往復する。帰りがけには、大きなお重の包みを持って。凡秋先生は食道楽でもあった。

森田先生の組織実習の試験では、当たった標本をかざして見ると、ペニスの横断だった。「全部知っている。合格まちがいなし」と思っていたら、顕微鏡下に何やら判らぬものを指された。「わかりません」と答えた。「アッハハ、ゴミだね」の一声で落第!でもこれは、私にとって一生の教訓になった。なにか新しいものをデーターの中にみつけると「ゴミではないか」と、まず考えたからである。

私が亥の鼻山で学んだ頃は、日本の学問のレベルが低かったのだ、中山先生はか何人かの教授は例外として、世界的な先生は少なかつたかもしれない。しかし、尊敬に値する「大教授」が多

くおられた。今はどうだろう。

私が千葉を離れた一九六九年頃は、世界中で大学改革の嵐が吹きまわっていた。「日本の医学はドイツ医学を学んだので封建的だ」などと言われていたが、ゲッティンゲンへ来てみると、大学改革は千葉出の私が追い付いていけない程すさまじいものであった。一方、時々千葉を訪れてみると、建物を変ったが、中身は二十五年前とあまり変わっていないようだ。

千葉を離れた同窓生は、それぞれ所を得て、その場の人になりきっているだろう。私は、合計二十九年もいたゲッティンゲン大学を「私の大学」と思う反面、長い留学をしていたようにも思える。四十人ものノール賞受賞者を生んだこの小都市で学んだものを、母校のお役にたてたら、といつも念願しているのだが、他の大学からは随分やってくるが、せっかく作った、千葉ーゲッティンゲン大学の協定があるのに亥の鼻からは近頃さっぱり来ない。

恋する亥の鼻から、肘鉄砲を食っているような気がしないでもない。(ゲッティンゲン大学教授)

るのほな随想(九)

野に咲くベロニカ

平 形 義 人 (昭19卒)

数年前、るのほな会会長 名尾良憲と副会長貫洞一夫 両先生を群馬県支部総会にお招きして、るのほな同窓会の活性化のお話を承りました。

その一つは、地方の意見を反映するための理事の増員でした。そこで、群馬から一名(代行二名)を出すこととなりました。東京のるのほな会総会が椿山荘で行なわれるのに故井上清君と一緒に招きを受けたり、千葉駅五階のペリエ・ホテルの総会や役員会に出席し、その後の四金会の賑わしい雰囲気接している中に、在学時代の古い昔が身近に感ぜられる様になりました。昨年には三回もるのほな会報が発行され、その巻頭に『初のるのほな同窓会賞』受賞の記事が載り、医学部長以下多くの教授の生の声が聞かれ、地方のるのほな会クラスの記事も豊富、総会の議事録まで、かなり詳細に発表される様にて、地方に居ても、るのほな会報をみるだけで、活性化が進んでいることが判ります。

百十二号の『O157情報』欄に、本学微生物学第二・野田公俊教授は一九八四年にO157毒素が志賀赤痢菌毒素と同じものであることを報告したが、感染者への偏見やいじめをなくそうと『正しい知識でO157いじめに対処』と題したマニュアルを作成したとの報道があったので、群馬県医師会では早速利用させて頂きました。

百八号会報から設けられた「るのほな随想欄」は、我々老医にとっては懐かしい思い出もあり、友の嬉しい消息もあり愛読の頁です。突然原稿用紙が舞いこんできましたので閉口しながら、思いつくままを記してお許し願いたいと存じます。

天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず、と云った福沢先生の慶応義塾は、独立自尊をモットーに、東大教授より地方の先生を輩出し、官界より財界、産業文化実業界に多くの人材を提供した。本学は明治七年に源を発しながら、卒業生は母校の教授になかなか成れなかった。初

めて昭和20年12月谷川教授が誕生するのである。然し実地医学に於ては傑出していた。教授陣は最初から東大に劣らなかつた。私には伝説の人であるが、三輪徳寛先生は手術室に

“Ein Doktor muss ein Falkenauge, ein Jungfernhand und ein Löwenherz haben.”

「獅胆、鷹目、行以女手」と掲げられ、一外の高橋信美教授は外科医必携の「手術書」を著し、会報の題字の鈴木五郎先生は手術の名人と許された。二外の瀬尾貞信先生の高弟中山恒明先生の名前は千葉の誇りである。眼科の伊東恵治教授は白内障手術に伊東式大槍状刀を発明してグレーフェの刀を用いながつた。門弟が未熟の時期でも失敗せずに手術が出来、実地医家の教育をして下さつたのである。

千葉県茂原市に永吉の眼科病院がある。寛政6年開設であるから二百年も続いた眼科病院で千葉保次先生七代(昭12)弥幸先生八代(昭43)で千葉大出身である。東京に「実地医家の会」を提唱。実現して、日本医師会賞の栄に輝いた永井友二郎先生(昭11)が居る。海軍軍医としてガダルカナル島救援まで行き、正に死線

を潜つた体験医学を生かされた名医である。るのほな・ながわ会報四号の巻頭に鴻忠義先生(昭13)の報告が載り、終戦の時、同仁会濟南病院眼科部長山東省立医専の教官をしていたところ、S20・8・8ポツダム宣言受諾の報を聞くや8月8日正午、国民政府軍が進駐して来ました。その接収司令官が千葉医専出身の郭軍医少将で、鴻先生以下千葉の同窓生は大変厚遇を受けられた。鴻先生の御尊父は千葉医専の最後の眼科教授鴻海蔵教授で、当時千葉には文部省から特別予算を貰つて中国人留学生を優遇し時には十人余もいた。教授会ではドイツ帰りの少壮教授なども「自分達もドイツでお世話になつて来た。今中国では日本を頼っているのだから面倒をみよう」との意向であつたと伝えている。

科伊東教室に入局した。以来今日まで、鈴木宜民、石川清、安達恵美子各教授の千葉眼科教室を故郷と思ひ、群馬で開業されていた横地良次助教授を何よりの先輩と仰いできた。それには伊東恵治教授の門下の『明德会』の薫陶があつたからである。

伊東教授は大正6年(一九一七)に東大卒、河本重次郎先生の眼科教室に入局。大正8年二十八才千葉医専教授に就任、大正12年に千葉医大教授になられ昭和30年(一九五五)ご退官まで実に三十年に亘つて眼科の教育と研究、教室員の指導に精進され百数十人の門下生を育てられた。その門下生の会を『明德会』と称し昭和11年1号の雑誌明德を出版した。

先生自ら之を守ると誓われ門下生の修養の目標とされた。伊東先生は昭和33年6月7日御逝去、六十六才でした。明德会の門下生は小田原在住四倉信雄(大正12年卒)を頭に、一昨年逝去された名幹事筒井榮、常連の久富良次、鈴木敏、藤平健、鴻忠義、会長の石川清、幹事麻羅徹三、柿栖米夫、(戦時中教室を守つてくれた。田那村恵津子、土屋晴雄、萩野裕、朝岡哲、斎藤達子、宮本みち子等が常連となつて、今尚、明德会は続いている。先生没後三十九年に及ぶとは他に例を知らない。

(参考、日本の眼科(一九九四)65:66号久富良次先生去る2月26日の常任理事

会の折りに大学までタクシーを飛ばし矢作の病院正門近く、旧大学会館玄関付近に入学五十周年クラス会を記念した「百日紅」の植樹を尋ねてみた。学苑整備のため連絡道路を越えた処にある体育館のすぐ南側に大切に移植されているのを見て井出源四郎君の御配慮に感謝した(写真)。

ついでに、新図書館を見て、在学中三年間お世話になつた千葉寺御殿といわれた間庭さんの旧宅を尋ねた。焼夷弾の直撃を受けて全く灰燼に帰した跡に、晩年中島元徳先生が入信したカトリック教会が建てられていた。途中、鈴木正夫、加賀谷凡秋両教授の家の周辺は

(四面一段へ続く)

第一条、大学の道は明德を明らかにするに在り。

第二条、博々之を学び審らかに之を同じ慎みて之を思い、明らかに之を辨し篤々之を行ふ。

第三条、其義を正して其利を謀らず、其の道を明らかにして、其功を計らず。

南宋の大儒朱熹先生の白鹿洞書院掲示と、江戸の儒者中江藤樹先生の藤樹規から伊東先生が自ら選ばれ、

復員して直ぐ叔父善寿(昭3)がお世話になつた眼科

昭和十九年度卒業クラス会にて傍らに立つ平形義人



▲植樹した「百日紅」(一番手前のもの) 体育館南に移植

(三面七段より)

すっかり麦畑がなくなって町に変わってしまった。乗り合わせた運転手が旧友滝沢俊夫君の患者で、ペリエに着く迄思ひ出話がつきなかった。

昭和16年入学の夏休み、鈴木重武教授の自然科学研究班に属し、実験動物のヒノビュウスをミクロトームで切片に切ったりしている時、豊田学生主事が霞ヶ浦航空隊のデンマーク体操の先生を招いて夏季体操講習会があり之に参加、OD会員となり、本学に体操班を都築君と共につくった。一時は野球場を埋めて全学員で体操し、殊に渥美大佐の教練の査閲で供覧する程であった。お蔭で海軍々医学校に行つて大変助かった。七十七才の今ゴルフに興味があるのもこのお蔭である。群馬県のはな会の常連の最長老、亀井清安様名病院現役院長が一昨年病院から感謝の米寿の銅像が建てられた。北村英吾(昭12)先生は群馬県医師会の長老として、昨秋の総会には特別講演をされた。私はこの3月一杯で、次期は沖眞澄先生に会長をお願いした。会長十年のうちに井出源四郎会長には何度も講師をお願いし、北京郊外の日中友

好病院顧問主席として北京に数ヶ月滞在中、天安門事件に遭遇した話や、昨秋の年次総会には青年時代に読まれた慟哭の歌人明石海人の『天刑は天啓に通ず』の話を会員一同感動を以て聞きました。

その後、女医林富美子の『野に咲くペロニカ』(小峯書店)の自伝を読み、明治大正、昭和に亘る救難史を知り、作者富美子夫人の実践活動はキリストが十字架をかついでゴルゴタの丘にひかれ行くあの坂道で、いたましく変り果てたお顔の血と汗を兵士の制止をかい潜ってかけ寄ってハンカチで拭いた信仰の夫人『ペロニカ』の如くであり、又、きびしい冬の終りに、路傍にあって空色の星のように小さく清らかな花をつける野草ペロニカに己を類えているところが、如何にもつつましく感動させられる。若き医学徒への推せんの手書にしたい。

— 亥鼻台の写真を —

お寄せ下さい！

終戦直後の焼け跡など歴史資料として保存すべき写真がありましたら、あのはな同窓会事務局へご連絡下さい。

コピーさせていただき、本紙への掲載など、広く活用させていただきます予定です。

病院紹介

J A 栃木厚生連マロニエ
メディカルセンター
下都賀総合病院

北西部に広がる那須や日光のイメージが強く、栃木県は山国と思われがちですが、宇都宮のある県央から南東部にかけては、関東平野の北部を形成する平坦な地形が広がっています。下都賀総合病院がある栃木市は、県の南に位置していますので、周囲は広く田園地帯であり、栃木市及び隣接する小山市以外は農業従事者が多く住んでいる地域です。また栃木市、小山市からは、都内への通勤者も多く、



く、謂る郊外都市の雰囲気。をただよわせています。当院は、農業協同組合により、昭和13年につくられた厚生連病院の一つですが、国公立病院の少ない栃木県にあって、日赤、済生会病院と並ぶ公的病院として、県民の健康を守るためにその役割はすこぶる大きいものがあります。病院は、九万人弱の人口をもつ栃木市のほぼ中央部にあり、JR栃木駅からは徒歩十分、新幹線小山駅からは車で二十分、東北自動車道、栃木インターから約五分と比較的交通の便は良いところにあります。病院の許可病床数は七百床(一般病床五百十二床、結核病床三十四床、精神科百五十四床)です。

すが、敷地が狭いうえに、病院そのものの狭あい化、老朽化等のために、現在一般病床は四百床強、使えているにすぎません。職員数は約五百名、医師数はその一割にあたる五十名ですが、その半数は千葉大学から派

遣されております。しかし従来当院は、新潟大学の大きな拠点病院として歩んできており、千葉大学からは三十年程前に二外科から出張していた程度で、謂る関連病院とはなっていないでした。約二十年前に自治、独協の両新設医大が同じ県南地区にできたこともあり、新潟、自治、独協の三大学からの派遣医師が多くなりましたが、他に群馬大、日本医大、北里大、日大、福島県立医大等が参入した混成体制でした。従って地方の古い病院のしきたりと相俟って、院内における相互連携は良好とは言えない状態でした。医療行政が年々厳しくなってきたことも加わって、経営状態は悪化の一途をたどり、栃木県厚生連としても思い切った組織再編の必要にせまられました。

一昨年の10月にそのような状況下で私が院長になったため、早速千葉大学の多くの教授に御指導をお願いして、人心一新を計った結果、前述したように千葉大学からの派遣が約半分を占める医局構成となり、はつきりした核ができ、各科相互の連携体制も整備されてきました。当然のように患者さんの数も増え、活気が出てきました。病院の運営も好

転してまいりました。この稿を借りて、御心配頂いたるの、御指導下さったのは、な同窓会の皆様に改めて厚く御礼申し上げます。

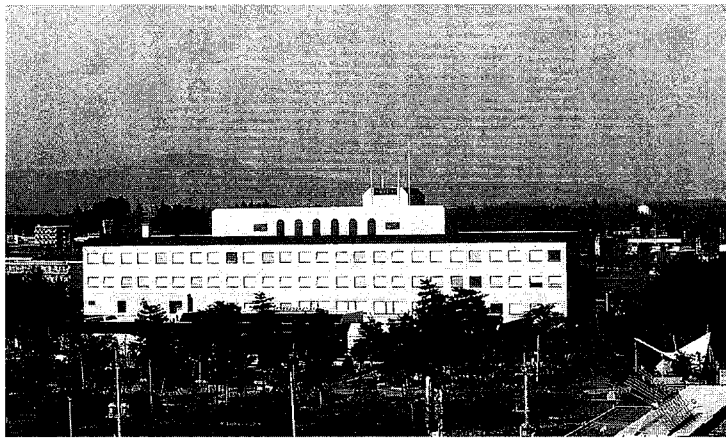
同じ県南地区にある自治、独協両大学とは私共の病院の規模の大きなゆえに競争することもあるのですが、地域中核病院としての我々の立場をよく理解して、その機能を重視し、患者さんにより近い姿勢で日常業務を遂行することを心掛けていますので、教育、研究機関であり、特定機能病院である両大学とは、病病連携の関係をより一層築きつつ、今後運営していきたいと思っています。今後のこの病院の課題は、何と云っても近い将来の移転新築のことになります。住宅密集地域で敷地が狭いため、病院そのものも狭あい化が大問題としておこっていますし、駐車場のスペースもありません。

近年病院に最も求められている一つである患者さんのアメニティーの面からは、一病床当たりの床面積が少なく、ロビー、休憩室、食堂等は揃っていない、救急外来治療室、ICU、手術室、リハビリ施設、器材室等は著しく狭いという状態です。その他職員の施設については、全く不備としかいいようのない箇所が多くある始末です。しかし現在の状態でも入院病床が不足している程、当院は地域住民に頼りにされている立場にありますので、病院規模の縮小は考えられません。そのため、当厚生連では、組織再編の機に、栃木県厚生連マロニエメディカルセンター移転、新築構想を練ってまいりまして、昨年正式に理事会や地域首長等で構成される病院運営委員会に提議し、採択されました。移転新築にあたりましては、ただ病院を新しくするだけではなく、老健施設等を含めた福祉施設、疾病予防、早期発見の立場からの保健施設等の充実も、益々すむ高齢化社会にあつては不可欠であり、同時に予定しています。

栃木市は西の倉敷市に対して東の「蔵の街」として観光都市化を計っているほどで、土日の休日には結構散策をしに来る人も多い所です。

あのはな同窓の先生方には、是非一度は街の散策がてら当院にお立ち寄り頂きたくお待ち申し上げていきます。

院長 川村 功(昭43卒)



筑波メディカルセンター

病院のあるつくば市は茨城県の南部にあり、東西十五km、南北二十五kmで、人口は約十六万人。隣接する土浦市の人口は約十三万人です。つくば市の中心部には東京駅から直通の特急バスで約七十分です。市内には八百床以上が二病院、三百床以上が六病院あり、病床は過剰気味です。病院はバスターミナルから北に1km、筑波大学病院との距離は三百mの至近距離にあります。当地はまだ緑

が多く、市街地を一寸はずれると、周辺は田畑で囲まれています。市の中心部にはさすがに狐・猪はいませんが、まだ狸・兎はひそんでいるし、オオカミ・ハヤブサ・コハクチョウ・キジ・カッコウ・ホトトギス・カワセミなど野鳥も豊富です。当病院は財団法人立です。財団法人筑波メディカルセンターは、一九八五年の科学万博開催にあわせて、地元の一医師会、県医師会、県当局、筑波大学が一体となって設立されました。設立にさいしては前筑波大学脳神経外科牧豊教授(昭和二十四卒)が大変な努力をされました。功労者のお一人です。当財団は救急医療から在宅ケアまで地域医療・保健の中核をめざしており、病院以外にも各種の事業を展開してきました。直営事業として、一九八五年二月に開院した

病院をはじめとして、ついで訪問看護ステーション、三番目に総合健診センター、四番目にデイケア・センターがあります。委託事業として、(1)急性薬物中毒を中心、治療、予防に関する情報提供業務を行う、つくば中毒一〇番、(2)三年課程の県立つくば看護専門学校、(3)在宅介護支援センター。茨城県の補助事業として、死因不明の急死例の原因究明を目的として行政解剖を業務とする、つくば剖検センターがあります。さて、筑波メディカルセンター病院は救命救急センター三十床をふくむ二百十八床です。「いつでも、だれでも、救命救急をふくめて質の高い医療が安心してうけられる」をモットーに運営されています。職員数は医師四十四名を含め四百八十九名。病院の役割は、救急医療を行う。二、開放型病院の機能を発揮する。三、臨床研究を行う。四、医療関係者の教育・研修に協力することです。診療科は、脳神経外科、心臓血管外科・循環器内科、消化器外科・消化器内科、呼吸器内科、小児科、整形外科、麻酔科、放射線科、病理科、リハビリテーション科の十二診療科と救急グループが

あります。看護は新看護二対一、プライマリ・ナースングを行っています。一九九五年統計で外来患者総数は十二万九千五百五十三名、一日平均三百五十三名、新患比率は二十三・六%、新患に占める紹介患者比率は二十七・二%、新患中救急患者比率は約二十五%、救急車による搬送は千八百件、新入院患者三千三百九十名、そのうち、予約入院が約五十%、救急入院が五十%で、救急入院のうち六百八十七名、約三十三%は救命救急センターへ入院しました。なお、病床稼働率は九十七・四%、平均在院日数は十八・八日でした。手術件数は千百件前後(うち緊急四十%)。各科の活躍の一部を紹介すると、救急グループは多発外傷の治療成績向上に、脳神経外科では重症くも膜下出血にたいする脳動脈瘤クリッピング術・塞栓術に、循環器内科は急性心筋梗塞に対しての冠動脈インターベンション(二百件/年)に、心臓血管外科は冠動脈多枝バイパス・胸腹部大動脈瘤の治療(開心術百件/年)に、消化器外科は悪性腫瘍の治療と食道静脈瘤の治療に精力を傾注しています。なお、茨城県地域がんセ

ンター百五十床の付設が認められ、本年四月着工、二年後に開設予定であり、がんセンター長には筑波大学病院手術部副部長石川昭雄助教授(昭和四十七卒)が内定しています。最後に当財団に關係するものは同窓会会員を紹介いたします。理事 長谷川雄雄筑波大学病院院長・呼吸器内科教授(昭和三十五卒)、能勢忠男筑波大学脳神経外科教授(昭和四十二卒)、佐藤忠夫県医師会副会長(昭和二十九卒)、海老原雄一土浦市医師会長(昭和三十一年卒) 職員 中田義隆(昭和三十六卒、病院長・副理事長)、小野幸雄(昭和三十七卒、総合健診センター所長)、大橋教良(昭和四十八卒、副院長・救命救急センター長)、目黒琴生(昭和四十九卒、副院長・在宅医療・デイケア事業部長・診療部長・脳神経外科)、福田幾夫(昭和四十九卒、診療部長・心臓血管外科) 筑波へおいでの節は是非お寄りください。お待ちしています。

筑波メディカルセンター病院 〒305つくば市天久保一三三 Tel〇二九八(五)三五一 Fax〇二九八(五八)二七七三 (中田義隆・昭三六)

「国立病院療養所再編成合理化」の嵐の中、当院は地域中核総合診療施設として着々その実をあげつつある。一昨年は創立五十周年を迎え、来し方を省み、想を新たに、将来を決意した。昨年は国病国療総合医学学会長施設として森前院長中心の懸命の努力により、参加会員四千名の満足を克ち得られたと自負している。 第三代会藤弘院長は高度医療提供のため附加価値を職員各自が考え実行することとを、続く伊東和入院長は和顔愛語を旨とし目的を掲げて積極的に取り組むこと、更に、森前院長は、調和と改革は自然の法なり、とし、内を知り時代を意識して全力を盡す一念を持ち続けること等々を理念として指導した。加うるに、全職員の努力の甲斐あって、病院運営も良好に推移し今日に至っている。

今後は、武者院長、鈴木副院長のコンビ宜しく、人材を派遣下さる千葉大医学部、病診連携、登録医各位の地域医師会等の協力、助言を得て、21世紀初頭に吾等が理想の実現を、と念願するものである。同窓会諸

賢の御援助を乞い願うものである。 伊東和人(昭二十三卒) 記

国立千葉病院 21世紀に向けて 新陣容で 国立千葉病院医師名簿 病院長 武者 廣隆(昭四十)内科 副院長 鈴木 一郎(昭四十二)外科 医 長 石川 堯夫(昭三十四)泌尿器科 西沢 直(昭三十七)循環器科 高沢 博(昭三十九)臨病理 内藤 準哉(昭四十二)耳鼻咽喉 青木 靖雄(昭四十三)外科 田沢 洋一(昭四十四)外科 白松 一安(昭四十五)外科 吉田 孝宣(昭四十六)内科 大川 玲子(昭四十七)産婦人科 青柳 光生(昭四十九)麻酔科 永瀬 譲史(昭五十)整形外科 内海 勝夫(昭五十)内科 武田 憲夫(昭五十一)眼科 山田 善重(昭五十二)循環器科 石毛 尚起(昭五十四)脳外科 小林千鶴子(昭四十一)看護大 富永 格(昭四十八)看護大 篠崎 文信(昭五十一)放射線科 西岡 正(昭五十六)看護大 江口奈緒美(昭六十一)皮膚科 名譽院長 森 博志(昭三十一)内科 この他、医員常勤、非常勤、レジデント、研修医計四十名、総計六十名の医師で診療に従事している。

平成8年度
卒業生進路

〔千葉大一内科〕浦木 茂
木村敬太、多田素久、蓼沼
寛、田中政道、中村和貴
奈良橋俊子、福田吉宏、山
田博之〔二内科〕池田 哲
河村治清、小林一貴、菅原
真由美、高山真理、田永幸
正、塚原高広、宮澤さおり
吉田知彦〔三内科〕岡井匡
彦、小野文明、進藤 哲
多嘉山恵子、中山 崇〔放
射線科〕上村昭博〔二外科〕
石田敬一、志田 嵩、須田
浩介、高野重昭、外岡 亨
新妻ゆり子、吉田一也〔二
外科〕石川千佳、中島和恵
宮本健志〔整形外科〕金子
慎一郎、腰塚周平、白井周
史、土屋 敢、仲沢徹郎、
蓮江文男、村田 亮〔産婦
人科〕平敷好一郎、福島寛
子〔眼科〕伊豫田 稔、上
村敦子〔皮膚科〕柿沼佑子
村田 薫、藤田伸弘〔泌尿
器科〕一色真造、木藤宏樹
〔耳鼻科〕桜井大樹〔小児
科〕岩佐美佳、落合秀匡、
鈴木修一、鈴木弘子、永竹
エレナ、東 浩〔精神科〕
柳橋 諭〔麻酔科〕浦野永
子、岡崎純子、崔 俊人
〔形成外科〕栗山元根、中
島 透、姫田十一、和田邦
生〔脳神経外科〕田宮重寛

沼田 理、米山智子〔肺外
科〕石川亜紀、千代雅子
〔呼吸器内科〕五十嵐夏彦、
大山雅代、小南聡志、猶木
睦子、日暮浩実、村上千代
子、安井山広、吉浦浩平、
河野正和、山川みどり〔救
急部〕森田武史、渡辺栄三
〔東大精神科〕大溪俊幸
〔内科〕菅田美保〔小児科〕
平岡亜矢〔大阪大泌尿器科〕
小森和彦〔北大泌尿器科〕
杉下圭治〔慶応大小児科〕
豊田麻紀〔順天堂皮膚科〕
藤林美緒〔千葉健生病院〕
安 浩義〔吉祥寺中医クリ
ニック〕石田聡子〔三井記
念病院〕大前和也〔船橋二
和病院〕木村裕行〔聖路加
国際病院〕星山 鏐〔武蔵
野赤十字病院〕行澤齊悟、
平澤瀬良美〔二宮市立病院
黒野健司

平成9年度

医学部入学者

〔千葉(県立)〕武智史恵
原田倫太郎、米津慎宏〔開
成〕篠崎勇介、桜井大路、
嘉納寛人、伊藤敬志、山崎
一樹、小川喜胤、北園 聡
〔桜蔭〕白川 優、武谷明
米、山地沙知、八幡江里子、
渡辺美佳、柴山 絢、大熊
麻衣子〔麻布〕猪俣 太、
道下崇史、鶴谷悠也、塩浜
直、河口貴昭、神崎 隆

樫沢政司、神田 潤、〔東
京学芸大附属〕佐藤真嘉、
高谷具純、遠間奈津子、柳
沢如樹、土居厚夫、錦見恭
子〔筑波大附属〕榎原雅代、
鳥海早矢佳〔筑波大附属駒
場〕津田康史、堀越琢郎
〔鹿児島ラサール〕宮城正
行、山路佳久、浜村 威
〔巣鴨(私立)〕高柳俊作、
野島広之、小林芳久、天野
貴宣、伊藤良浩、三ツ井崇
司〔武蔵(私立)〕神谷潤
一郎、島田 斉、小林将行
〔桐朋〕鈴木英一郎、田村
友作、〔駒場東邦〕林 秀
紀、関水匡大、高橋 宏

一〔八王子東〕手塚真紀
〔青雲〕水室圭一〔野沢北〕
新津富央〔嘉穂〕横山真隆
〔佐倉〕篠原 翼〔厚木〕
森野知樹〔学習院高等科〕
土屋 掌〔お茶の水女子大
附属〕上野 翠〔栄光学園
林 達也〔甲府第二〕野口
佐綾香〔共立女子〕葛西孝
美〔池田学園池田〕上原孝
紀〔芝〕青木利夫〔愛光〕
広瀬陽介〔前橋(県立)〕
伊藤裕太〔浦和一女〕高橋
奈々恵〔広島県立府中〕小
玉隆裕〔秀明〕太田拓実
〔江戸川学園取手〕春日章
良

平成9年度

大学院医学

研究科入学者

〔解剖学〕王 曉里〔生
理学〕地理夏提、阿不拉
〔生化学〕武 玉萍〔微
生物学〕大井浩資〔寄生
虫学〕文 惠聖、劉 卉
〔免疫学〕稲垣好昌、原田
通成、本間史之、藪内真貴
山崎誠彦、吉田英明〔病原
真菌学〕堀内クリス・ナメ
グミ〔分子遺伝学〕富田和
宏、中津 史〔医真菌学〕
SWARAJIT K BISWAS
〔遺伝生物学〕姜明模、張
弘〔衛生学〕大澤俊雄、
YIN KI O O〔公衆衛生
安藤道子、山内常男〔医療
情報学〕中野広樹、劉 亜

斌〔内科学〕池内 哲、
更科由紀、田中耕太郎、新
島光起、平野達也、深町唯
博、本告成淳〔内科学二〕
浅海 直、和泉秀彰、小野
田昌弘、木下真子、塚原佳
代、花岡英紀、原 暁、平
野憲朗、廣瀬晃一、福田和
司、宮本植浩〔内科学三〕
石井 徹、伊藤雄一、今井
裕文、浦野美晴、黒田央文、
松本泰典、米沢真頼、渡辺
聡〔内科学肺研〕泉崎雅
彦、板倉明司、小泉健一、
鈴木陽一、徳田敦子、三橋
理恵、森田瑞生〔神経内科
学〕内山智文、小河原一恵
柏戸孝一、溝淵敏子、森
雅裕、山口美香〔精神神経
科学〕大島龍男、寺本 靖
服部功太郎〔皮膚科学〕鎌
田憲明〔外科学〕石塚

一郎〔眼科学〕伊藤 彰、
根岸久也〔耳鼻咽喉科学〕
留守卓也、野村知弘、武藤
博之〔泌尿器科学〕江越賢
一、貝淵俊光、小島聡子、
塩見 興、浜野 聡〔歯科
口腔外科学〕村野彰行〔麻
酔科学〕加藤里絵〔脳神経
外科学〕神作憲司〔救急医
学〕疋田 聡

第三十八回東医体冬季大会スノー部門開催

主管校 千葉大学

第三十八回東日本医科学
生総合体育大会スキー競技
部門という大変長つたらし
い名の競技会が千葉大学の
主管により、平成8年3月
17日から3月23日までの七
日間、長野県菅平高原スキ
ー場で開催されたので紹介し
ます。
「るのな」第百十号に
青木謹先生(昭36)が書い
ておられるように、この大
会は千葉大学医学部スキー
部が提唱し、昭和35年1月
に第一回大会を千葉大学が
主催したものです。第四回
大会(昭38年於八方尾根)
も主管をしており、今回が
三度目の主管でした。第二
回大会から福島県立医大、
弘前大学や札幌医科大学など北
国の大学が参加し、更に回
を重ねる毎に参加大学や参
加人員が増加し、競技種目
も多くなり、大会の運営を
単独大学で行うのが困難な
状況になってきたようです。
次の第三十九回大会からは
グループ主管になると聞き
(七面一段へ続く)

第三十八回東医体スキー競技実行委員長 落合信靖

めでですので、食事だけでなく談話・憩いの場としてお気軽に利用できます。更に、二階には集会室と和室があります。

まだ出来たばかりですので内装はやや殺風景ですが、これから順々に整備されていくのと。また、一階二階の部屋は宴

るのは同窓会への寄付
佐藤 研一（昭35卒）
千葉大名養教授
10万円

川島 恂二（昭20卒）

各地るのほな会

群馬県支部だより

平成8年11月30日、前橋市内マリーキュリーホテルで総会、講演会、懇親会を開催した。

総会では平形会長から「我が群馬支部も千葉のるのほな会の活性化運動に呼応して、規約改正、会員名簿発行、組織の充実等が計られた。ここで会長を沖真澄副会長に譲り気分を新にして一層の発展を計りたい」との発言があり、全員賛成の拍手で決定された。又渋谷功(59)君の入会があり、現会員は六十八名となった。井出源四郎るのほな同窓会長の「時事放談」と題されての講演は、大学の現況から医療の使命、翻って医の原点に及び、多彩、豊富、格調高い井出節は多大の感銘を与えた。

即ち待望の図書館が約十億円を投じて、旧病院北側に完成したこと。医学教育の見直し論。るのほな会に医の倫理懇談会を創り、現役学生への提言を計ること。高齢化社会対策へも医道の追求が必要であること。又

北京の日中友好記念病院顧問主席であった先生は、日中親善外交の上からも、今後も尚提携してこの病院の発展に寄与すべきであること。漢方と西洋医学との融合発展は日本が重要な役割を果たす他ない、殊に伊東弥恵治教授以来の伝統ある東洋医学研究を無にしてはならないこと、戦後総合大となり、今や全国第四番目となつてその五十年記念日が近づいたこと、等々であるが、最後に青春時代よりの癡者の歌人「明石海人」の歌集「白描」の序文

「癡は天刑である。加はる筈の一つ一つに嗚咽し泣きあるひは呻吟しながら、私は苦患の闇をかき搜つて一縷の光を渴き求めた：(略)：人の世を脱れて人の世を知り、骨肉と離れて愛を信じ、明を失つては内にひらく青山白雲をも見た。癡はまた天啓でもあつた。」

と暗誦され、初め癡を憎み、又医者をも憎んだであろう彼が、天刑は天啓に通ずると悟るところに医療の原点が在ると喝破され、一同大拍手、大喝采。

記念撮影に次いで懇親会に移り、今年九十才の榛名病院院長亀井清安先生(10)の首頭で乾杯。各員の自己

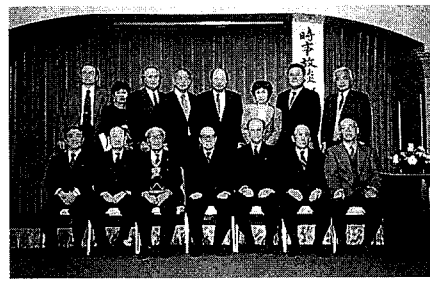
紹介、近況報告が次々になされ、欠席会員の消息なども語り合い最後に根本幸一先生(29)の詩吟、頼山陽作「船大垣を発して桑名に向う」と宝生流仕舞「羽衣」シテ平形会長 地謡鹿山徳男先生(29)が披露され、会の発展とお互いの健勝を祈って散会した。

写真説明 前列左から山口隆久(25) 糸井猛彦(22) 亀井清安(10) 井出源四郎(19) 平形義人(19) 沖真澄(22) 西村忠雄(32) 後列左から黒岩璋光(37) 阪原重利沙(48) 鹿山徳男

クラス会

三五会 (昭和35年卒)

生憎の雨の土曜日となつた平成9年3月8日、帝国ホテルインペリアルタワー「北京」で三十一名の年会をもつた。帝国ホテルといえば明治村の趣であつたが、今や何処も一様に立派になつて個性が失われるのは戴けない。それでも、幹事の雨宮浩(小児医療研究センター)、田中明(秋津養育園)、小山明(秩父宮記念診療所)、高橋徹(東京国際大)、こ



(29) 根本幸一(29) 本島梯司(45) 小林けい子(50) 小林道生(48) 中田益允(35) (西村忠雄 記)

とにクリニック開業の貞永嘉久には、きも入りの本会の他に二次会までも用意して貰つた。

久しぶりに現れた筑波大附属病院長の長谷川鎮雄の乾杯の首頭で本年度停年の佐藤研一教授(歯口科)の労をねぎらい、三五会から退官記念会に抛金することとした。亥鼻分館長の嶋田裕が新宮の図書分館について、評議員の佐藤甫夫が大学の改革などについて話した。

成田静子(開業)、堀田とし子(習志野病院)、谷嶋つね(山王病院)のわが女性軍の他に、なくなった岩崎勇の道子夫人、各務正暉の正子夫人の参加をえた。

三六会 (昭和36年卒)



平成9年の三六会は、3月8日(土) 9日(日) 南房州鴨川市鴨川グランドホテルで開催された。日本在

子供さん達それぞれに成人した由で何よりである。

今年すでに、銀座と千葉で「絶景松島湾」の個展を開いた岩瀬秀一(開業)が写真を撮ってくれた(写真)。ニューヨークでの個展は本誌(第一〇五号 1994年6月)でも紹介されたが、今回は写真集「巨海音聲Ⅲ 松濤」の出版である。

来年は佐藤重明(鹿島労災病院長)が幹事で成田で、再来年は阪信(与野市医師会長・開業)が大宮で、2000年には千葉で卒後四十年の会を盛大にもつこととした。(藤村真示 記)

住者七十四名への予備調査で、返信なし十一名、出席希望者三十三名であつたが、最終的には、当日出席者が二十名となつてしまった。これは、現役で活躍中という年まわりのせいで喜ばしい事と考える。

日程は、8日が南房花めぐり(館山市南房パラダイス・千倉町白間津の露地栽培花島の散策・丸山町ローズマリー公園)と宴会、翌9日は、ゴルフ組、鴨川市内シワールド見学組など南房の春を満喫した。

8日夜の宴会には、花のシーズンたけなわの為、車の渋滞で難渋した連中も居たが、集合時間よりも早く全員が集まつたので幹事は気がもめなかった。我々三六会は殆ど毎年開いているので各自の近況報告はせず中島伸之一外科教授の母校近況報告をお願いした程度で、専らアワビステーキ(別名鮑の踊り焼き)をはじめとした山海の珍味を酒の肴に舌鼓をうった。二次会は館内のバー白南風で、ライトアップされた打寄せる太平洋の荒波の素晴らしき光景を眺めながら春宵の一刻を楽しんだ。

久し振りの出逢いは、お互いに別れ難く、中島教授持参の大吟醸を飲もうと、



第91回医師国家試験行われる

本年の医師国家試験は3月15日、16日に行われ、4月18日に合格発表があり、七、八三九名の新医師が誕生した。本学から一〇六名が受験し、合格者は一〇〇名で、合格率は九四・三％であつた。なお全国平均は八八・一％、国立大学の平均は八八・一％であつた。

広々とした洋室に殆ど全員が集まり、潮騒を聞きながら、価千金の夜を過ごした。出席者、大川治夫夫妻、長谷川修司・幸子夫妻、藤塚立夫夫妻、谷合明、福井勇副島訓子、前嶋清、松本生国安芳夫、青木謙、三宅伊豫子、岡田信道、黒田健昭、近藤省三、中島伸之、野本一夫、田部井徹(幹事 福井勇・青木謙)

国公立・私大
勤務者名簿

筑波大学附属病院 *併任
病院長 *長谷川鎮雄
副病院長 *深尾 立
臨床医学系
教授

長谷川鎮雄(昭35)(呼内)
大川 治夫(昭36)(小外)
白石 博康(昭36)(精神)
深尾 立(昭39)(消外)
能勢 忠男(昭42)(脳外)
小山 哲夫(昭43)(腎内)
助教
能勢 晴美(昭42)(眼科)
吉井與志彦(昭44)(脳外)
轟 健(昭45)(消外)
石川 詔雄(昭47)(手術部)
野村 文夫(昭50)(検査部)
講師
伴野 悠士(昭45)(脳外)
青柳 一正(昭46)(腎内)
榎本 貴夫(昭47)(脳外)
大塚 雅昭(昭51)(消外)
兵藤 明夫(昭52)(脳外)
岩川眞由美(昭53)(小外)
吉澤 卓(昭53)(脳外)
高田 彰(昭54)(医療情報)
基礎医学系
教授
工藤 典雄(昭41)(生理)
医療技術短期大学部
教授
坂庭 操(昭48)
佐藤 元(昭50)
(平成9年3月現在)

人事異動

名誉教授

佐藤研一(昭35)
高橋英世(昭32)
山口 豊(昭31)
附属病院長
山浦 晶(昭40)
脳外科学教授

本学他学部教授昇任
上田志朗(昭50)
千葉大学薬学研究科
(本学第一内科講師より)
他大学教授昇任
山田達夫(東医歯大昭49)
福岡大医学部内科
(本学神経内科学助教昇任)
城戸昭彦(金大昭54)
金沢大医学部保健学科
(本学衛生学助教昇任)
助教昇任
井坂茂夫(昭51)
泌尿器科(同講師より)
下山一郎(昭48)
生理学第一(同講師より)
林 文明(帝京大昭53)
生理学第二(同講師より)
廣島健三(昭54)
肺研病理(同講師より)
幡野雅彦(昭57)
高次研生体情報
(同助手より)
児玉和宏(昭53)
精神医学(同講師より)
大野博司(昭58)
遺伝子情報分野
(同助手より)
古関明彦(昭61)

高次神経分野
(免疫機能分野助手より)
講師昇任
桑木共之(東大理昭56)
生理学第二
(東大医生理助手より)
水見壽治(昭55)
内科学第三(同助手より)
山西友典(昭57)
泌尿器学(同助手より)
赤倉功一郎(昭59)
泌尿器科(同助手より)
福武敏夫(昭56)
神経内科(同助手より)
白澤 浩(昭57)
微生物学第一
(同助手より)

厚生省人事移動

山崎修道(昭36)
国立感染症研究所長
(国立予研所長より)
吉川武彦(昭36) 国立精神・
神経科・精神保健研所長
(国立精神神経・武蔵病
院部長より)
武者広隆(昭40)
国立千葉病院院長
(同病院副院長より)
三木 亮(昭38)
国立横浜病院院長
(国立横浜東病院院長より)
退職
森 博志(昭31)
国立千葉病院院長

千葉県職員人事移動

(4月1日付)
がんセンター
長山忠雄(昭38)
センター長
(医療局診療部長より)
藤田昌宏(昭34) 医療局長
(医療局診療部長より)
吉原暉文(昭40) 診療部長
(診療部婦人科部長より)
間山素行(昭44)
消化器内科部長
(主任医長より)
丸岡正幸(昭50)
泌尿器科部長
(主任医長より)
田川雅敏(昭54)
研究局病院研究部部長
(千葉大学医学部講師より)
横田 朗(昭63) 医長
(千葉大二内科より)
鈴木 実(平1) 医長
(千葉大肺病研究施設より)
小林洋二郎(平2) 医長
(国保松戸市立病院医長
より)
鈴木洋人(平2) 医長
(医員より昇任)
救急医療センター
角田興一(昭40)
センター長
(医療局長より)
伊東範行(昭44) 医療局長
(診療部長より)
渡辺義郎(昭44) 診療部長
(検査部長より)

佐藤 章(昭46) 検査部長
(第三診療科部長より)
石橋 巖(昭55)
第一診療科部長
(医長より)
中村 弘(昭53)
第二診療科部長
(医長より)
八木下敏志行(金沢大昭56)
第三診療科部長
(医長より)
荒木雅彦(昭60) 医長
(鹿島労災病院より)
精神科医療センター
平田豊明(昭52) 主任医長
(医長より)
こども病院
伊達裕昭(昭50)
脳神経外科部長
(主任医長より)
亀ヶ谷真琴(日医大昭52)
主任医長
(医長より)
一般県立病院
蜂巣 忠(新潟昭42)
東金病院院長
(国立佐倉病院医局長より)
芹沢 徹(昭61)
鶴舞病院院長
(公立長生病院より)
木元博史(昭61)
佐原病院院長
(千葉大三内科より)

退職
鈴木通也(昭31)
がんセンター長
吉田 豊(昭32)

がんセンター医療局長
野口照義(昭32)
救急医療センター長
大久保恵司(昭32)
東金病院院長

るのな同窓会報
編集委員会
平成9年度 第1回
日時：平成9年5月15日(木)
5:00~8:00
場所：ペリエホール
桂の間
出席者：青木 謹、井出源
四郎、北原 宏、古関明
彦、白澤 浩、鈴木信夫、
柳橋雅彦、矢野浩二朗
議事項目：

一、新編集委員の紹介
二、第一一四号の校正
三、第一一五号の編集
四、第一一六号以降の編
集
五、活字と写真の大型化
六、年四回発行
七、各地るのな同窓会
支部との連携
八、インターネット化
九、旧るのな同窓会報
学生編集部卒業生と
の懇親会
常任理事会議事録
平成8年度
第三回常任理事会議事録
日時：平成9年2月26日(水)
16:00~17:30
場所：千葉市ペリエホール

出席者：井出会長、加納、
渡辺、近藤副会長、大藤
参与、平形、山上、茂又、
貫洞、伊藤、高村、萩原、
小杉、小幡、長沢、越川、
香田、三枝、清水、磯野、
嶋田、増田、木内、福田、
佐藤各理事。

議題
一、名誉会員推薦の件 本
年3月御退官の清水、高
橋、山口、佐藤(研) 四
教授を名誉会員に推薦す
ることに決定。
二、叙勲者・昇任者の四金
会招待。
三、同窓会顕彰規程 るの
はな同窓会賞とは別に、
別記の功労賞規程(十面
に掲載)が新たに制定さ
れ、平成9年度から実施
されることに決定。
四、同窓会費の自動振込に
ついて 来年度から実施
予定の自動振替による会
費の納入を千葉銀行系の
収納会社を通じて行うこ
とに決定。
五、医学部施設助成 生化
学実験室にエアコンを設
置する件につき、特別な
予算措置を計ることに決
定。
六、役員改選の件 次回総
会での役員改選に向けて
基本的事項について意見
を交換した。
(十面二段へ続く)

平成8年度決算報告書
自平成8年4月1日

平成9年3月31日至

収入の部

款 項 目	予算額(円)	決算額(円)	対予算増(△)減(円)	備考
会 費 等	12,000,000	14,853,250	2,853,250	
他会計より受入	700,000	358,517	△ 341,483	
寄 付 金	1,710,000	2,496,559	786,559	
雑 収 入	264,000	334,751	70,751	
(当期収入計)	14,674,000	18,043,077	3,369,077	
前年度繰越資金受入	3,702,404	3,702,404	0	
収 入 合 計	18,376,404	21,745,481	3,369,077	

支出の部

款 項 目	予算額(円)	決算額(円)	対予算増(△)減(円)	備考
総 務 費	4,685,000	4,636,236	48,764	
事 業 費	9,640,000	7,610,343	2,029,657	
積 立 金	1,850,000	4,400,000	△ 2,550,000	
次期繰越収支差額	0	5,098,902	△ 5,098,902	
予 備 費	2,201,404	0	2,201,404	
支 出 合 計	18,376,404	21,745,481	△ 3,369,077	

(九面七段より)

七、平成9年度の諸会議日程等が別項の如く決定。

(四金会) 引き続き同所で

四金会が開催された。学部長ほか多数の会員が出席、盛況かつ和やかな楽しい雰囲気であった。

平成9年度

第一回常任理事会議事録
日時…平成9年4月23日(水)
4:00～5:40

場所…センシティ東天紅
出席者…井出会長、加納、渡辺、近藤各副会長、大藤、藤井、笠川監事、山上、沖、貫洞、茂又、高村、長沢、越川、小幡、森、香田、三枝、嶋田、佐藤、木内各常任理事。

議事…

一、平成8年度決算案(別記)が監事報告のあと承認された。

二、平成9年度予算案が一部修正の上、承認され、総会へ提案することになった。

三、本年は役員改選の年にあたり、各支部、各学年の推薦を参考に、総会に計る役員の名簿が確認された。監事の一部交代、常任理事の一部交代及び追加、評議員の追加が若干行われる予定。

四、第二回るのはな同窓会

賞の受賞候補三名と同功

労賞候補三名が決定した。授賞は総会にて行われる。

五、昇任者・叙勲者および

あらたに名誉会員に推薦された四名養教授の四金会招待の件が計られた。

六、総会議案(予算・決算・役員改選等)が確認され

た。

七、その他

(1)次回の名簿改訂は二年後の郵便番号の改訂はあるものの、従来通り三年毎に行うことに決定。

(2)功労賞関係の予算と具体的内容につき意見をほぼ固めた。

また、現在るのはな同窓会賞規程、顕彰規程の二つの規程がある。

近い将来、選考は二つの大区分(学術賞、功労賞)に分けて行うが、るのはな同窓会賞として一本化する方向で検討することになった。ただし、2月の常任理事会で成立した功労賞関係の規程は全文を会報に掲載することにした。

(3)同窓会費自動振替実施のこと、会報関係、千葉大学五十周年記念事業関係のことなどについて報告と意見の交換

が行われた。

四金会…引き続き同所で、四金会が行われた。三枝

理事の司会で、井出会長の挨拶、加納副会長の乾杯に始まり、和やかに歓談の時を過ごし、会の途中、名誉会員になられる

先生方(清水、山口、佐藤、各前教授)、山浦病院長ほか御招待の先生方

について、近藤副会長より紹介、また各先生より御挨拶や抱負などを伺った。若い先生方も多数出席され、賑やかで、活気に溢れた会であった。多

世代の交流・交歓がますます発展するよう期待している。(文責：佐藤)

るのほな同窓会

顕彰規程(功労賞)

一、本規程は、医学および広く文化の各領域において千葉大学医学部および千葉大学のはな同窓会に多大の貢献をしたものの功労に感謝し、これを顕彰することを目的とする。

二、顕彰の対象は以下の四種とする。

国際貢献…国際交流および海外医療の向上に尽くしたものの

教育・文化…教育、芸術およびスポーツなどの領域

において功績顕著なもの

医療・福祉…行政・医療・福祉…行政の分野において優れた実績のあるもの

他の功績…自己の危険を顧みず人命救助したもの、公益のため私財を寄付するなど功績顕著なもの

三、本規程により表彰される故人または団体に対し、同窓会は表彰状および記念品を贈呈し、総会ならびに会報にて顕彰を行う。

四、顕彰者の選考は選考委員会、理事会の議をへて会長が行う。

付則

一、前条の選考委員会は別途に定めるまで、るのはな同窓会賞選考委員会と読み替える。

二、この規程は常任理事会の承認の日より発効する。

三、平成9年2月26日常任理事会承認、発効。

おくやみ

塩田 西雄(大13)

安部 宝一(昭9)

横須賀 孝(昭11)

中尾 信(昭11)

磯貝 豊(昭11)

広山 保男(昭13)

鈴木 定夫(昭15)

鬼頭 研二(昭16)

窪田 英造(昭19)

原 一郎(昭20)

今井 利一(昭22)

吉野 満(金大専24)

関根 勤(日大)

児玉 豊一(慈恵24)

中村 典男(専25)

松本 清一(専25)

高橋 新一(昭26)

佐藤 宏(昭26)

宮澤 陽一(平7)

編集後記

ラジオ深夜便というNHKの深夜放送があります。懐かしい音楽、放談や説話など様々な趣向が凝らされている番組です。視聴者からの問い合わせや要望なども随所で紹介され、時には、アナウンサーとの懇談会も東京や大阪で開催されております。病氣療養中の方や最近親族を亡くした方々など、様々な経歴をもつ人々の参加番組ともなっており、眠れぬ夜には恰好の番組と言えましょう。

さて、この深夜放送を聞く時、いつも思うことがあります。特に、郷愁を感じさせる番組内容の時です。このラジオ番組のように、るのはな同窓会報をより良い活字番組としたいという願いです。

本紙の体裁の改善やるのはな随想という新企画を前

号で記載しましたが、その他、現編集委員である青木謹先生の貴重な御提言により、種々の機関の人事異動を載せるなどの様々な努力をしております。しかし、この会報をより親しみやすい集いの場とする為に、読者諸氏の声を必要としております。関東やその近辺以外の地で御活躍なさっている先生方のお便りもお待ちしております。本号でご執筆いただいた高野光司先生や平形義人先生の「るのほな随想」が一つの切っ掛けとなることを願う次第です。(鈴木信夫 記)

るのほな同窓会

編集委員会名簿

(委員長)

鈴木 信夫(昭47) 大学

(元委員長)

井出源四郎(昭19) 大学

(前委員長)

嶋田 裕(昭35) 大学

(委員)

青木 謹(昭36) 千葉

今井 力(昭22) 東京

北原 宏(昭43) 大学

古関 明彦(昭61) 大学

白澤 浩(昭57) 大学

野村 文夫(昭30) 筑波

福田 陽(昭32) 東京

藤森 宗徳(昭37) 千葉

柳橋 雅彦(昭46) 千葉

山本 達郎(昭57) 大学

(医学部学生委員)

矢野浩二朗(平5入学)